

うすい やしきあと
臼井屋敷跡遺跡
－空間利用の変遷－

嘱託調査研究員 木村 寛之

遺跡の位置と立地環境

遺跡は佐倉市吉見字臼井屋敷 244-1 他に所在し、鹿島川と手繰川の河川作用によって開析された標高約 30m の台地上に位置している。

調査の概要

臼井屋敷跡遺跡はこれまで計 11 回の調査が行なわれているが、今回の報告で主に取り上げる調査は、宅地造成に伴い平成 18 年 7 月 3 日から 10 月 31 日まで当センターが調査を行なった第 10 次調査である。

上層の本調査面積の合計は、6,146.95 m²である。遺跡の時代は、旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世の各時代に及ぶが、縄文時代早期（条痕文）の炉穴と中世の土塁に囲まれた主郭部が遺構の中心を占める。当然のことながら、縄文時代の遺構は奈良・平安時代を中心とする後世の遺構に破壊されているものもある。調査の概要は下記のとおりである。

本調査 平成 18 年 7 月 3 日～10 月 31 日

調査面積 6,146.95 m²（上層）

検出遺構 ＊縄文時代

炉穴 33 基、廃棄貝ブロック 2 ヶ所 2 基、土坑・柱穴群

＊弥生時代

竪穴住居跡 1 軒、方形周溝墓 1 基、土坑群

＊奈良・平安時代

竪穴住居跡 4 軒、土坑群

＊中世

台地整形区画 1 ヶ所、土塁 1 ヶ所、地下式坑 7 基、井戸状遺構 2 基

調査の成果

＊縄文時代

今回の調査で検出した遺構の中で最も古いものは、調査区西側の舌状台地の傾斜に沿って配置されている炉穴群である。炉穴の配置は数基が集中して群を成し、その群が台地縁辺部を環状に囲むという形態をとっている。

炉穴内部から出土した土器から、早期（鵜ヶ島台式～茅山下層式）に当たる時代に構築されたものと考えられる。

炉穴がこのような斜面上に作られた理由は、炉として使う際に風を利用するためであり、季節に伴う風向きの変化に対応するために主軸を変えて環状に作ったと思われる。

廃棄貝ブロック 2 ヶ所については、ともに炉穴の覆土上面から検出しており、廃絶された炉穴の埋没過程で利用されたものであろう。また、貝ブロック内から出土した土器片などから早期（茅山式）に廃棄されたものと考えられることができる。

貝ブロック内の貝類は、アサリを主体とした鹹水産、特に干潟に生息する貝で構成されている。魚骨・獣骨は、出土しなかった。このような傾向は、同時期の印旛沼周辺の貝塚と同様である。

＊弥生時代

今回検出した遺構は、後期の竪穴住居跡 1 軒と中期方形周溝墓 1 基である。

竪穴住居跡は調査区西側の舌状台地のほぼ中央部に位置しており、出土した土器の中で最も新しい弥生時代後期初頭のもので時期決定を行なった。

方形周溝墓は、調査区東部の台地平坦面に位置している。今回検出した方形周溝墓の主軸や規模は、平成 13 年に行なわれた第 2 次調査によって検出さ

れた方形周溝墓群とはほぼ同一であり、出土遺物から見ても同時期（中期後半）のものと考えられる。したがって、墓域の西端に位置するものと考えてよいだろう。

*奈良・平安時代

今回の調査では主な遺構として、竪穴住居跡4軒を検出した。検出位置は東側の台地平坦面及び南側の傾斜面というように一定ではないが、出土遺物や住居の形態からおおむね8世紀後半～9世紀に構築されたものと考えられる。また、竈^{かまど}を検出した住居跡は3軒で、それらの住居跡の主軸方向はほぼ一致している。

*中世

今回の調査は、主に調査区中央に存在する主郭部を対象としたものであった。

主郭部周囲には土塁・溝が構築され、土塁内部は周囲の地表面より低く整形されている。このような形態は下総地域で多く見られるものである。他の屋敷跡としては、千葉市南屋敷遺跡^{みなみやしき}や四街道市池ノ尻^{いけのじり}館跡^{やかた}、山武市埴谷周路遺跡^{はにやしゅうろ}などがあげられ、いずれも15世紀後半～16世紀代のものとされている。本遺跡の主郭部も出土遺物から、上記の遺跡と同じく15世紀後半以降に構築されたものと考えられることができる。

また、主郭部内部から地下式坑を7基検出した。千葉県内の地下式坑の数量は、築瀬裕一氏が2006年11月に集成した時点で204地点・1,836基であり、報告等で遺構数が不明な地点もふくめると2,000基と推定されている。機能については様々な諸説があるが、築瀬氏は有力なものの一つとして穀類貯蔵庫説をあげていて、本遺跡についてもほぼ同様な機能を有していたものと思われる。また、今回検出した地下式坑では播鉢^{すりばち}や板碑材^{いたびざい}、貝類などが出土しているが、いずれも底面からのものではなく、埋没過程で廃棄もしくは混入したものと考えられる。

今回の調査では、12世紀代～15世紀中頃の遺物は出土しなかった。一方で、平成16年に行なわれ

た第5・6次調査で屋敷跡とされた台地整形区画は、出土した土器から12世紀中頃～15世紀中頃まで屋敷として機能していたと考えられる。

今回の屋敷地の性格については、同様の主郭構造（土塁を持つ、主郭内部が周囲より低いところに存在する等）を持つ千葉市南屋敷遺跡や四街道市池ノ尻館跡の例や、本遺跡の主郭内に戦闘をうかがわせる遺構・遺物が少ない点などから、上層農民が在地領主が平常時に利用した屋敷と想定される。

いまだ推論の域はでないが、現在「臼井屋敷」と呼ばれる由来となった中世の屋敷地は、15世紀に加速化した集村化の動きや、それに伴う地縁的共同体の成立という流れに伴って、近隣に位置する吉見城を核とした集団自営網により構築されたものであろう。また、屋敷地は、その役割の変化に応じて移動したと思われる。

おわりに

今回の調査区は、平坦面や斜面地といった地形変化に富んだ場所である。斜面地は縄文時代には生活域として利用されていたが、それ以降はほとんど利用されていない。一方、縄文時代にはあまり利用していない台地平坦面は、弥生時代には墓域として、中世には生活域として活発に利用するようになり、時代により空間利用が変化する様子が追えた。

今後の課題としては、長年に渡る調査成果をまとめ、各時代における本遺跡の空間利用の変化を明らかにし、各時代ごとに印旛沼周辺域における本遺跡の位置づけを検討しなければならないだろう。



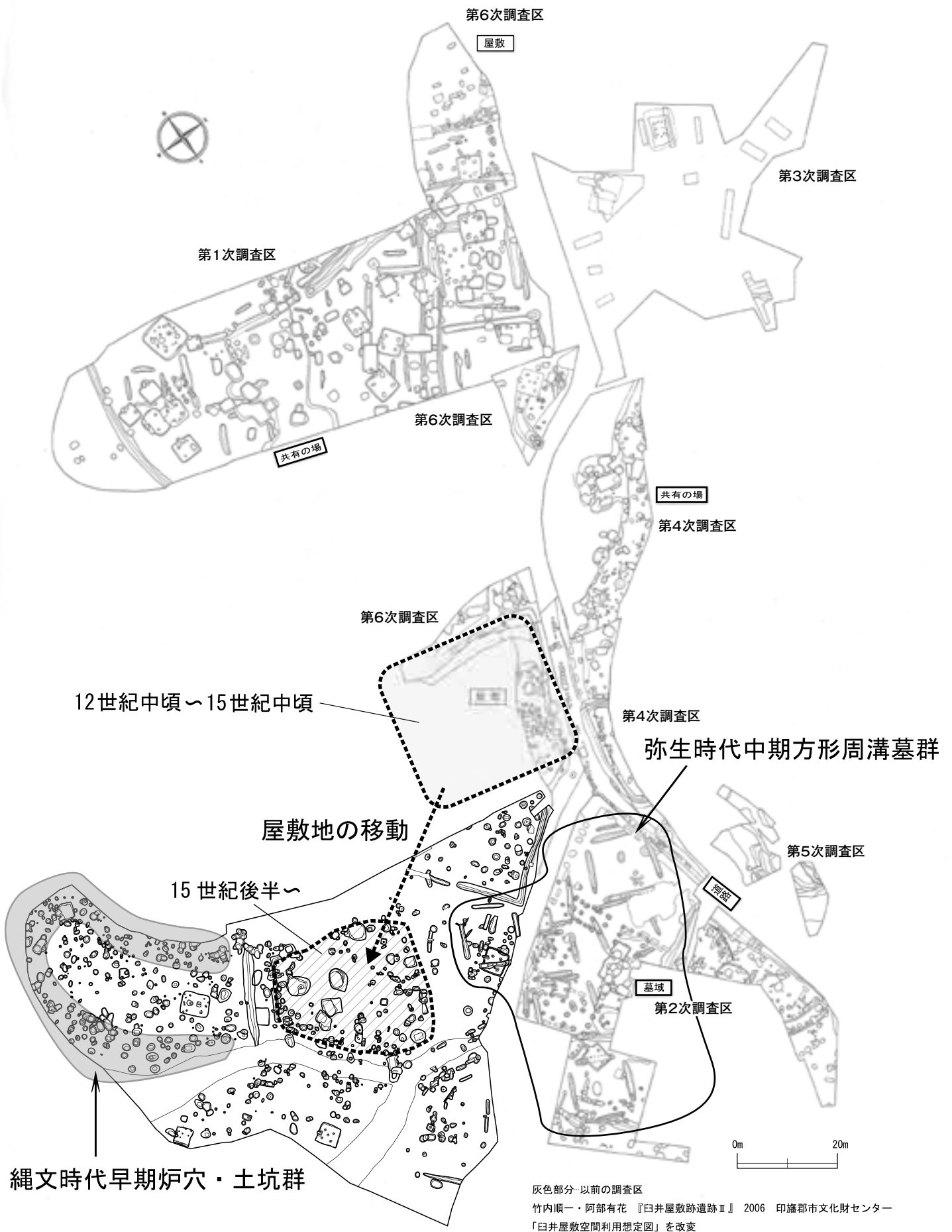
白井屋敷跡遺跡（第10次）全景写真



第7図 白井屋敷跡遺跡 位置図



廃棄貝ブロック 断面写真（拡大）



第8図 白井屋敷跡遺跡空間利用変遷想定図 (S = 1/1,000)